

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Notes on Studies of Food Sharing in Hunter Gatherer Societies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004033

狩猟採集民社会における食物分配

—諸研究の紹介と批判的検討—

岸 上 伸 啓*

Notes on Studies of Food Sharing in Hunter-Gatherer Societies

Nobuhiro Kishigami

狩猟採集民社会における食物分配に関してはさまざまな研究がなされてきた。本稿ではそれらを社会・文化人類学的研究, 生態人類学的研究, 進化生態学的研究, 霊長類研究に大別し, 諸仮説を紹介し, 検討する。そしてイヌイット研究が狩猟採集民社会における食物分配研究に貢献できるテーマとして, 1) 人口規模が小さいキャンプ集団と人口規模が大きい村における食物分配の違いを解明すること, 2) 特定の集団(コミュニティ)を対象として食物分配の変化と現状を通時的に解明すること, そして3) 地域間や同一地域内における食物分配の差異や共通性およびその歴史的变化を解明すること, という3つの研究課題を提示する。

There are several studies on food sharing in hunter-gatherer societies. This short paper reviews hypotheses about sharing in socio-cultural anthropology, ecological anthropology, evolutionary ecology, and primate studies. Then, in relation to anthropological studies of Inuit food sharing, I make three basic proposals whose exploration may contribute to a better understanding of food sharing in hunter-gatherer societies in general. The first is to explore differences between food sharing practices in a small-scale camp group and those in a large sedentary community. The second is to explore temporal changes and continuity in the contemporary food sharing practices of a specific community. The third is to explore regional similarities and differences in Inuit food sharing practices from a historical perspective.

* 国立民族学博物館先端民族学研究部

Key Words : food sharing, hunter-gatherer societies
キーワード : 食物分配, 狩猟採集民社会

1 はじめに	4.2 血縁淘汰 (kin selection)
2 社会・文化人類学的研究	4.3 互惠的利他主義 (reciprocal altruism)
2.1 狩猟採集民社会と食物分配	4.4 容認される盗み (tolerated theft)
2.2 食物分配をめぐる社会関係	4.5 協同による獲得 (cooperative acquisition)
2.3 食物分配の社会的機能	4.6 適応度ベネフィットとしての食物分配 (adaptive benefits)
2.4 食物分配をめぐる心理	5 霊長類研究
2.5 食物分配と世界観	6 研究成果と問題点の整理
2.6 食物分配と社会変化	6.1 研究成果の整理
3 生態人類学的研究	6.2 イヌイット研究による狩猟採集民研究への貢献の可能性
3.1 生態学的な適応手段としての食物分配	7 結語
3.2 生活の「シェアリング」と食物分配	
4 進化生態学的研究	
4.1 偏差減少モデル (variance reduction model)	

1 はじめに

狩猟採集民社会では、ハンターが獲物を他のハンターと分け合ったり、他者に一方的に与えたり、相手に要求されて与えることなどが頻繁に観察されている。このような行動は食物分配 (food sharing) という概念のもとに一括されてきた。そして食物分配は狩猟採集民社会の特徴のひとつであるとみなされ (例えば, Service 1962; 1966: 14-21; Woodburn 1982; Leacock and Lee 1982: 8; Lee 1999: 826; Lee and Devore 1968, Barnard 2002: 6-8), これまで多数の研究がなされてきた。

食物分配に関する研究のレビューとしては、プライス (Price 1975) やケリー (Kelly 1995) の著作が存在し、社会間でかなりの多様性が見られること、その起源や存在理由をひとつの機能や要因では十分に説明することができないことが指摘されている。私は別稿 (岸上 2002; n.d.; Kishigami 2002) において、サーリンズ (Shalins 1965; 1972; サーリンズ 1984) やサービス (Service 1966), ピーターソン (Peterson 1993), ウッドバーン (Woodburn 1998), ハント (Hunt 2000) による食物分配の形態に関する諸見解を整理・検討し、これまでの研究では、いくつかの類型に分けて分析されるべき食物分配行動が「互酬性」に基づく交換として一括して取り扱われてきたことを批判した。そのうえで、食物分配行動を分類したり、記述したり、比較したりするための新

たな類型を提案した。(岸上 2002; n.d.; Kishigami 2002)。

本稿は、狩猟採集民社会における食物分配に関する諸研究を社会・文化人類学的研究 (socio-cultural anthropology), 生態人類学的研究 (ecological anthropology), 進化生態学的研究 (evolutionary anthropology), 霊長類研究 (primate studies) に大別して紹介し, 問題点を検討することを目的としている。さらに, 本研究に基づいてイヌイット研究がこの分野に貢献できる可能性のある研究課題を提示したい。

なお, 本稿においては「他者」という表現を用いるが, これは異文化的他者でなく, 食物分配の相手となるエゴ以外の人間を意味していることをお断りしておく。

2 社会・文化人類学的研究

2.1 狩猟採集民社会と食物分配

ウッドバーンは人類の社会を即時的収穫システム (immediate return systems) と遅延的収穫システム (delayed return systems) の2つに大別した¹⁾ (Woodburn 1982)。即時的収穫システムの社会では, 人々は労働から直接収穫を得る。入手した食料はその日か, 数日中に消費し, 手の込んだ加工をしたり, 貯蔵したりすることはない。通常, 彼らは移動性に富み, 狩猟道具や日用品は単純で, 持ち運びができ, 容易に入手できるようなものを使用している (Woodburn 1982: 432)。彼らの社会では, 階層や身分の差が見られない。一方, 遅延的収穫システムの社会では, 投下した労働に対する収穫がすぐには得られない。そこでは計画的な労働投資と食料の貯蔵が行われ, より定住的で複雑な社会組織を持つことが多い。

即時的収穫システムの狩猟採集民社会では, 富, 権力, 威信などの点において平等主義が認められ, さまざまな実践によって平等性が維持されているとウッドバーンは主張する。また, その社会組織には次の4つの特徴がある。第1に, 社会集合は柔軟性に富み, その人的構成は常に変化している。第2に, 諸個人はだれとともに住み, だれとともに狩猟や採集を行うか, だれと交易や交換を行うか, だれと儀礼を行うかなどについて個人的に選択することができる。第3に, 生存に必要な諸資源へアクセスするために特定の他者に依存することはない。第4に, 人々の関係は分配や相互依存を強調する一方, 長期にわたって特定の他者と特別な関係を維持したり, 特定の他者に依存することはない (Woodburn 1982: 434)。

ウッドバーンは, 即時的収穫システムの狩猟採集民社会を特徴づける平等主義と分

配という実践は相互に深くかかわっていると述べている (Woodburn 1982: 440-442)。分配には、富や余剰物を平準化する機能があり、集団の成員間の平等的な関係を維持させる一翼を担っているというのである (Woodburn 1982: 442)。

バーナードは狩猟採集民社会のような食物採捕 (foraging) に基づく、もしくはかつて基づいていた社会を生産様式ではなく思考様式によって特徴づけることを提案している (Barnard 2002)。そして現在およびかつての狩猟採集民には、共通した「採捕思考様式」(foraging mode of thought) が認められると指摘している。そのひとつが、狩猟採集民は蓄財を反社会的と見なす一方で、分配に価値を置くことである。

2.2 食物分配をめぐる社会関係

テストールは狩猟採集民社会において観察される獲物の分配は、非オーストラリア狩猟採集民型とオーストラリア狩猟採集民型という2つのタイプに分けることができ、両者の相違は親族体系のタイプが異なっていることに由来すると考えている。

非オーストラリア狩猟採集民型の食物分配とは、イヌイットやサン、アカ・ピグミーなどの狩猟採集民社会において行われている分配であり、獲物を獲ったハンター自身が分配を開始する (Testart 1987: 292)。イヌイットやサンの分配には、相違点が観察されるものの、エゴを中心として同心円状に広がっていく親族関係の社会的距離や空間的距離と、分配の頻度の間には相関関係が見られる (Testart 1987: 295)。このタイプの分配では、親族関係はハンターが獲物をいかに所有・利用するかについてを決定づけることはない。テストールはこのタイプをオーストラリア狩猟採集民型と区別し、システムA (非オーストラリア狩猟採集民型の分配) と呼んでいる。

もう一方のタイプは、オーストラリアの狩猟採集民に認められる分配のタイプで、テストールはシステムB (オーストラリア狩猟採集民型の分配) と呼んでいる。このタイプでは、獲物を獲ったハンター以外の人によって分配が開始されるという。ハンターは獲物を獲った後、獲物を自らの所有物とすることは許されず、別の人がそれを接収し、分配を行う。ハンターは自らがしとめた獲物の部位で最悪の部分しか入手することができないうえに、それ以外の部位の分配を行うことも許されていない。実際に獲物の分配を行い、その部分を受け取るのは、ハンターの姻族、義理の父、義理の兄弟であり、その次がハンターの兄弟である。獲物に最初に命中した槍の所有者であるハンターは、最後に残り物を得るに過ぎないのである (Testart 1987: 292)。

オーストラリア先住民社会では、双分制や四分制、八分制の組織が存在し、それぞれの単位は分族 (セクション) と呼ばれる。テストールはオーストラリア先住民の社

会がいくつかの分族から組織されている点に注目する。血族関係と姻族関係との間や外婚的な半族間、異なる世代間というように、一方の分族は他の特定の分族と相互補完的を形成している。獲物を獲ったハンターがその獲物を所有・利用できないことは、そのハンターが属する分族と相互補完的な分族に属する人々がその獲物を所有・利用できることを意味している (Testart 1987: 296)。このように、システムBは、オーストラリア先住民の社会構造の一部をなしている。例えば、分配と外婚との間にはアナロジーが認められる。ハンターは自分たちの半族に属する女性を性的に消費しない(結婚相手とすることができない)のと同じように、自分自身が獲った獲物は食物として消費しない。消費するのは、自らが属していない相互補完的な関係にある半族の成員である。その基本原理は、「もっとも近いものとの断絶、もっとも遠いものとの結合」である (Testart 1987: 299)。オーストラリア先住民社会では、親族関係が優越しており、社会行動や経済行動を規定しているといっても過言ではない。

テストールは非オーストラリア狩猟採集民型とオーストラリア狩猟採集民型との違いをマルクス主義的な視点から説明しようとする。テストールは生産関係 (social relations of production) を「生産者と非生産者を結びつける関係であり、かつ生産物が両者の間で分割 (devide) されるやり方を規定する」 (Testart 1987: 300) と定義している。非オーストラリア狩猟採集民型の分配では、獲物の一部が最終的にハンターに戻ってくるようになっている。一方、オーストラリア狩猟採集民型の分配では、生産者から他の人々のために生産物が完全に奪い取られるようなやり方で分配されている。生産者は直接、生産物を所有・利用できないが、コミュニティ全体による社会的生産の集約的な所有・利用が行われている。従って、オーストラリアの狩猟採集民とそれ以外の狩猟採集民とは、異なる生産関係が存在しているので、異なる生産様式が作動しているとテストールは考えている。

テストールの研究以外にも、食物分配と社会関係に着目した研究が存在する。例えば、サンの間では肉は狩猟での役割や親族関係に応じて義務的に分配されると報告されている (Lee 1979; 1993; Marshall 1961; 1976: 297-298; Tanaka 1980: 95-96)。サン (ケン・グループやガイ・グループ、ガナ・グループなど)の間では、肉の第二次分配は近親者に優先的に行われている (Marshall 1976: 297-298; 今村 1993: 20)。また、中央アフリカのロバイ地方に住むアカ・ピグミー社会においては、肉の第二次分配が親族関係に基づいて行われている (Bahuchet 1985: 371; 1990: 33)。アカ・ピグミーの複数のグループを調査した丹野は、アカ・ピグミー社会は決してばらばらな個人の集合ではなく、親族関係が彼らの分配行動を規定し、生活そのものが「シェアリング」であ

ると主張している（丹野 1991）。しかしコンゴ共和国リクアラ州ドンゲー地区リンガンマカオ村周辺に住むアカ・ピグミーのグループを調査した北西は、第二次分配は親族関係に基づくとは限らないと報告している（北西1997: 21）。

カナダ・イヌイトの事例では食物分配は必ずしも親族間で行われるものではないが（Damas 1972）、アラスカのユッピックとイヌピアックやカナダのイヌイトのそれはおもに親族関係によって組織される生業システムの一部として作動しているため、両者には強い相関関係があることが指摘されている（例えば、Ellanna and Sherrod 1984; Burch 1988; Wenzel 1981; 1995; 2000; Kishigami 1995; 2000; 岸上 1998）。

2.3 食物分配の社会的機能

食物分配の社会的機能に着目する研究が存在する。食物分配は、複数の機能をあわせ持つ社会制度である。ムプティ・ピグミーやサンの食物分配を比較検討した市川は、食物分配には物質的な平準化機能（Woodburn 1982）をはじめ捕獲量の変動や狩猟能力の個人差を緩和する機能があることを指摘している（市川 1991: 28）。

カラハリの狩猟採集民の定住村で調査を実施したケントは、食物分配には平等主義的關係を維持させたり、家族間や友人間での連帯を創出し、維持させる機能があることを報告している（Kent 1993）。同様な機能はユッピック社会やイヌイト社会、アカ・ピグミー社会など他の社会でも指摘されている（例えば、Dowling 1968; Damas 1972; Langdon and Worl 1981: 36, 39; Bahuchet 1990）。カナダ・イヌイトを研究してきたウエンゼルは、イヌイトの食物分配は個人の生存よりもコミュニティ全体の福利に貢献していると述べている（Wenzel 1991）。

2.4 食物分配をめぐる心理

腕のよいハンターが食物分配を行うのは、それによって社会的に高い評価（prestige）を得ることができるからだという見解が存在している。オーストラリア先住民社会では、人々はだれが腕のよいハンターであるのかをよく知っているという（Altman and Peterson 1988: 80）。そしてその先住民社会では、腕のよいハンターは表面的に他者からどのように扱われようが、そして彼自身が肉を分配できなくても、常に高い社会的評価を得ているという。このような視点に立てば、ハンターは獲物を他者に与えることによって名声を得ることができる。これが、食物分配が行われている要因のひとつではないかと考えられている。

市川は食物分配が負い目感情や不均衡な社会関係を生み出す作用があり、多義的な

性格を持っていることを指摘している（市川 1991）。市川らが指摘するように、食物やその他の財やサービスの一方から他方への提供は、受け手に負い目感情や提供する方に優越感を生み出すことが予想される。

モースは『贈与論』（1973）の中で、無文字社会では贈り物を受け取った側が負い目を感じ、適当な時間の間隔をおいて必ず贈り物を送り返すと述べている。哲学者の今村仁司は、贈与と交換を峻別し（今村 2000: 5）、贈与慣行とは慣習的な行動や制度化された行動として観察される「与える」ことと見なしている（今村 2000: 112）。この定義によれば、狩猟採集民の食物分配は贈与のひとつである。今村は、なぜ人間が自発的に返礼を期待しない無償贈与という行動をとるのかという問題に関し、「負い目感情」（今村 2000: 119）という要因を強調する。負い目感情とは、恩義や負債の感情である。今村は「負い目感情は、人間の実存の基礎的な構成要素」（今村 2000: 68）であり、負い目感情がなければ人が純粹に与えることはありえないと主張する（今村 2000: 119）。

今村は贈与行為を競争的なタイプと非競争的なタイプに分け、両者の違いを説明している。競争タイプの贈与行為は負い目の共有を否定し、ランクの優位競争となる一方、非競争タイプの贈与行為は贈与をし合うことで負い目を共有し、平等性を維持するという（今村 2000: 126）。前者においては当事者間に優劣関係が形成される一方、後者においては当事者間でものを分かち合うことによって連帯の関係が生まれるという。

今村の説明は哲学的でありながら、狩猟採集民の民族誌的事例にも符合するようと思われる。しかし人間の感情に関する人類学的なアプローチは残念ながらあまり開発されていないため、フィールドにおいて食物の分配行為にかかわる心の動きを正確に把握することは現時点では困難な試みである。食物分配を行う当事者の感情の研究は今後の課題のひとつであるといえよう。

2.5 食物分配と世界観

アラスカのネルソン島のユピック社会を調査したフィエナップ=リオルダン¹は、動物から人へ、人から動物へといった象徴的なサイクリングや交換のイデオロギーが生業活動、親族関係、婚姻、獲物を獲る側と獲られる側との関係、儀礼、アザラシ肉の分配、男女間の性的分業など日常生活のあらゆる領域の基盤となっていることを指摘した（Fienup-Riordan 1983）。アザラシ肉の分配のやり方や肉の流れは、その背後にある世界観を具現化したものと考えられるのである。スチュアート（1991）もネツ

リク・イヌイットの食物分配の事例を、世界観やそれに基づく男女の役割分担の点から理解しようと試みている。

バード=デイヴィッドは、インドのナヤカを事例として取り上げ、彼らは環境とは親のように与えてくれる (giving) 存在であるという見解を有していることに注目している。さらに彼らの経済は「与えること」のうえに成り立っており、分配の強力な倫理を持つと同時に、要求による分配を実践している (Bird-David 1990)。この「与えてくれる環境 (giving environment)」という考え方は狩猟採集民が共有している特徴であり、狩猟採集民の経済は「与えること」という考えから構築される経済システムを共有していると主張している (Bird-David 1990: 194)。

これらの見解では狩猟採集民が持つ環境観もしくは世界観の故に、分配という倫理や実践が成立していると考えている。しかし、世界観や倫理観は特定の行動を社会的に容認し、奨励するイデオロギーとして機能するが、それらが食物分配のような行動をとらせる直接的な原因と考えてよいかどうか、私は疑問に思う。

2.6 食物分配と社会変化

マーフィーとスチュワードは、社会経済的に成層化が進んでいない小規模な社会が交易を通して貨幣経済に巻き込まれると、大きな文化変容を起こし、最終的には民族文化とそれを担う社会は崩壊し、大きな国家システムの中に取り込まれてしまうと予測した (Murphy and Steward 1956: 350, 353)。ピーターソンらの研究は、狩猟採集民社会は貨幣経済の浸透に対して、マーフィーとスチュワード (Murphy and Steward 1956) が予測したよりはるかに複雑で多様な反応をしていることを例証した (Peterson and Matsuyama 1991)。定住化や貨幣経済の浸透が進む1980年代から1990年代のイヌイット社会やサン社会、ピグミー社会では、食物分配は重要な社会経済的实践として行われていることが指摘されてきた (例えば、市川 1982; Ikeya 1993; 1996a; 1996b; Kishigami 1995; 2000; 岸上 1996a; 1996b; 1998; Kitanishi 2000; Wenzel 1995; 2000ほか)。定住化や経済のグローバル化などによって食物分配がどのように変化していくかを、大きな社会経済変化として捉えることは重要な課題であるといえるが、食物分配の形態や機能の通時的な変化や貨幣経済の浸透が食物分配へ及ぼす諸影響についての研究はあまり多く行われていない²⁾。

3 生態人類学的研究

3.1 生態学的な適応手段としての食物分配

狩猟採集民の食物分配とは、狩猟の成功・不成功やハンターの狩猟能力の個人差に起因する獲物の捕獲量の差を減少させる手段であると考えられている。多くの生態人類学者は、分配とは不安定で予測できない自然の変動に対する保険のようなものであり、個人を困窮から守る機能があると考えている (Gould 1982; Wiessner 1982; Cashdan 1985; Winterhalder 1986a; 1986b; Smith 1988; 渡辺 1990)。例えば、ウイスナーは、サン (クン・グループ) は個人や家族の間で食物分配をすることによって集団内での食物不足のリスクを分散していると主張している (Wiessner 1982)。また、ハロ (hxaro) と呼ばれる資源交換パートナーの制度があり、パートナー間で資源が交換されるほかに、パートナーが住んでいる地域の動物や水、燃料などの諸資源の利用を可能にしている (Wiessner 1982: 67-68; Barnard 2002: 8)。サン (クン・グループ) 社会では、食物分配はハロの制度とともに個人もしくは家族のレベルで食物供給の不安定性を解消するための社会制度であるとされている。

サン (クン・グループ) の社会を調査したビーゼレとホーウェルは、交易ネットワークや相互扶助のための親族ネットワークを形成し維持してきた人々が、老人になり自活できなくなった後も、そのネットワークを通して援助や贈り物を受け取っていることを報告している (Biesele and Howell 1981: 91)。このように見れば、若い時の食物分配は老後の備えもしくは養老保険のようなものといえる (Kelly 1995: 179)。

グールドは、非常に可変的な環境下においてのみ食物分配は存在すると主張した (Gould 1982)。そのような環境下では、食物分配は必要な時に頼ることができる社会的な紐帯を創り出すという。これが、オーストラリアの西部砂漠に住むンガダジャラが広範な食物分配を行っている理由であると彼は考える。さらにグールドは環境的な厳しさが緩和されると、食物分配は限定されたより小さな範囲の人々の間で行われるようになることを示唆した。

アカ・ピグミーの食物分配を生態学的な視点から分析した北西は、狩猟やハチミツ採集における個人ごとの収量差が、アカ・ピグミー社会内外の社会・経済的要因とどのようにかかわっているか、さらにその差が食物分配によってどのように解消され、キャンプの成員が十分な食料を手に入れることを可能にしているかを解明した

(Kitanishi 1996)。

以上のように、食物分配を狩猟採集民の環境適応の手段であるとする見方が存在している。この見解の中心的な仮説は、偏差減少モデル (variance reduction model) と呼ばれている。この仮説は、進化生態学的研究の箇所でも再度取り上げることにはしたい。

3.2 生活の「シェアリング」と食物分配

カラハリ砂漠中央部のサン (ガイ・グループとガナ・グループ) 社会において食物分配を調査した今村薫や中央アフリカの熱帯雨林地域のアカ・ピグミーを調査した北西の報告を読むと、いくつかの興味深い指摘が認められる (今村 1993; 1996; Kitanishi 1996; 1998; 2000; 北西 1997; 2002)。

日本人によるアフリカの狩猟採集民研究では、食物分配にはいくつかのタイプがあることが指摘されている。例えば、狩猟場で獲物の肉をハンターが分配する第一次分配、ハンターが持ち帰った肉がキャンプの成員に分配される第二次分配、料理された肉などがキャンプの人々に分配される第三次分配に区分され、食物分配が研究されている (今村 1993; 北西 1997)。また、食物分配には第一次分配のような規則による義務的な分配と第二次分配や第三次分配のような親しい人間への自主的な分配があることが指摘されている (今村 1993: 20-21; 北西 1997)。そして男女間では食物分配行動に差異が存在することが示唆されている (今村 1993; 北西 1997)。さらに、日本人の研究者、特に京都大学系の研究者は、食物分配を対面的な関係の交渉の所産であると捉える傾向が強い (今村 1993; 北西 1997)。

今村は食物分配だけを独立した研究対象とするのではなく、協同作業と分配行動を貫く行動原理の解明を試みた。彼女はサンの女性の活動である採集と調理に着目して研究を進め、食物の分配に関しては、近くにいる人に頻繁に食物を分け与えていると報告している。その交渉は居住や親族関係など構造的な支配下にあるのではなく、交渉の中で生じる個人間の関係によって築かれており、食べるという行為を共有することが彼女たちにとって重要なだと指摘している (今村 1993: 17-19)。また、食物分配や植物の採集などの協同作業においては、人々が作業の全体像を共有しながらともに自発的に行動をしており、その行動基盤として同調 (性) があると指摘する。同調とは他者との関係において起こる一種の感応ないし共振のことである (今村 1993: 20)。

今村は食物分配や協同作業などさまざまな対面的な相互交渉による行為を統御するシステムのことを「シェアリング・システム (sharing system)」と呼び、「彼らにとっ

てあらゆる場面に参加し、共有することの方が本質的であり、協同や食物分配はそのシェアリング・システムの中での出来事のようなもの」(今村 1993: 21) であると主張する。そしてそのシェアリング・システムはサンが遊動生活を送っていたころは、キャンプを単位として機能していたという(今村 1993: 21)。

今村は、生態的な適応の視点から食物分配を説明するのではなく、食物分配は実用性を越えており、生存のためというよりも、彼らの生き方を確認し、「生き直す」場として存在しており、一種の儀礼のようであると述べている(今村 1993: 23)。さらに義務的ではなく具体的で対面的な相互行為によって行われるサンの食物分配は他者と新たな関係を再生していく力をはらんでいると指摘する(今村 1993: 23)。最後に、食物分配を含め社会の基盤となっているのは同調性であると主張している(今村 1993: 23)。今村は別稿において、彼らにとっては体験を共有することがもっと大切なことであり、食物の分配も体験の共有の一部であり、社会の中核をなす「シェアリング」とは物質や体験を共有することであると主張している(今村 1996: 76-77)。この見解はアカ・ピグミーの食物分配についての丹野(1991)の見解とほぼ同じであるといえよう。

また、北西はアカ・ピグミーの食物分配と居住集団との関係を吟味し、肉をだれに与えるかは、肉の第一次分配を除けば親族関係のようなフォーマルな社会関係で決まるのではなく、居住集団の中で作り出される対面的な関係によって決定されると指摘する(北西 1997)。北西が調査を行ったアカ・ピグミーの第一次分配は、狩猟において果たした役割に応じて肉がハンターの間で分配される。この分配には義務的で厳格な規則が存在している。一方、肉の第二次分配や第三次分配は義務的ではなく、厳格な規則がない自発的な分配である(北西 1997: 7-8, 21)。この第二次分配や第三次分配によって肉は繰り返しキャンプにいる人に分配され、キャンプ全体に行き渡る傾向がある(北西 1997: 12)。

北西はこの調査によっていくつか興味深い報告を行っている。第1に、果物やヤム、キャッサバのような料理する前の植物性食物の分配については、女性の間では親族関係に近いほど分配される割合が高くなる傾向が認められる(北西 1997: 12-13)。第2に、料理の分配数に深くかかわっている要因は、料理の量、キャンプサイズ、食物禁忌、料理の内容である(北西 1997: 14)。第3に、キャンプサイズと女性同士の間での分配について、次のようなことが観察されている。キャンプの規模が小さな場合には、同じキャンプに住んでいるということだけで必然的に料理を分け合うが(北西 1997: 15)、キャンプの規模が大きい場合には、分配相手を選択される。後者の場合、料理

の分配の大枠を決めるのは、まず小屋の配置に基づくグルーピングであり、その中でより近い親族関係にあるもの同士がより頻繁に食物分配を行っている（北西 1997: 16）。第4に、アカ・ピグミーの評価が高い食物ほどより多くの人にもしくは広い範囲に分配されている（北西 1997: 22）。第5に、肉の第一次分配を除けば、食物の所有者はだれに分配するかについて強制されることはなく、その所有者はキャンプサイズや親族関係、空間的な距離などを考慮に入れながら分配相手を選択している（北西 1997: 19）。北西は、大きなキャンプでは親族関係が分配相手の選択の要因となることを指摘している。「他から孤立し、限られた少人数の人と常に顔を突き合わせてつきあう森のキャンプの日常生活においては、まんべんなく関係を保つことが重要であるのに対して、多くの人が集まりより開かれた村のキャンプにおいては、その中でごく限られた人間を分配相手として選択しなければならない。その選択に親族関係が強く影響を与えているのであろう」と述べている（北西 1997: 22）。北西は孤立した集団と開かれた集団における分配の差異や両者の社会関係の違いについては分析していないが、この命題は定住後のイヌイットの食物分配にも共通性が見いだせそうである。

4 進化生態学的研究

進化生態学的研究はおもに生物の行動やその進化を研究対象としてきた。1970年代の後半から一部の人類学者が狩猟採集民の狩猟採集活動や食物分配のパターンがいかに維持されているかを解明することを目的として、そのアプローチを応用するようになった（Winterhalder and Smith 1981; Hawkes 1992; Smith and Winterhalder 1992; Kelly 1995; 口蔵 2000）。

この研究アプローチは2つの前提のうえに成り立っている。第1に、時間や資源には限りがあるため、諸個人（もしくは諸個体）はトレード・オフに直面する。トレード・オフとは、同時に達成できないいくつかの要件についての兼ね合いのことである。あることに個人がより多くの投資を行えば、それ以外の何かへの投資が少なくならざるを得ない。それは個人にとってはある行為をとることを決めるうえで重要なコスト・ベネフィットの問題となる。第2に、諸個人の間では利害がしばしば重複するが、それらが完全に一致することはほとんどない。すなわち諸個人間にはある程度の利害の対立が存在する。

このような仮定に立つ進化生態学では、食物分配を個人の利他行動として捉え、それを説明する複数の仮説が存在している（Kaplan and Hill 1985a: 224-227; Hawkes

1992: 274-276; 室山 1999: 141-146)。例えば、カプランとヒルはアマゾンに住む狩猟採集民アチェの食物分配を利用して4つの仮説の検証を試みている (Kaplan and Hill 1985a; 1985b)。ここでは、生態人類学的研究として紹介した偏差減少モデルの検証を含めて紹介したい。

4.1 偏差減少モデル (variance reduction model)

狩猟採集活動から得られる日々の成果には常にばらつきが観察される。ある時には十分な食物を得ることができるだろうし、別の時には食物をまったく得られないかもしれない。潜在的な食物不足の問題は、食餌幅の増大 (食物の多様化) や食物の貯蔵、交換、分配によって解決が可能である。狩猟採集民はコスト・ベネフィットを考慮に入れながら、これらの戦略を採用していると考えられる。

ウインターハルダーはコンピューター・シミュレーションを利用して、コスト・ベネフィットの観点から食物分配と食餌幅の増大との比較を行った。その結果、狩猟採集効率を低下させることなく、日々の食物資源の偏差を減少させるためには、食餌幅を広げるよりは食物を分配する方が有利であるという結論に達している (Winterhalder 1986a; 1986b)。彼は、環境が個人の平均的な収穫率の差異にどのような影響を及ぼすか、同一キャンプ・グループ内でどのような食料資源が収穫されているかという2つの要因が食物分配の範囲を決定していると主張する。そしてひとつのキャンプを構成しているハンターが異なる獲物を捕獲しようとする傾向があり、ハンター間の収穫率に大きな差異があればあるほど、人々は食物分配を頻ぱんに行うという。そして食物分配の効果は、ハンター数が7, 8人の小規模集団の場合に最大になるという (Winterhalder 1986a; 1986b)。

スミスは、食物分配が最大の人数に対して最大量の食物を提供するだろうという場合においてすら、食物の貯蔵という戦略の方が長期的には有利な戦略であるだろうと考えている。しかし狩猟採集民が食物分配を実践し続けているのは、相手の行動を相互に監視しあっているようなシステムの存在、互酬性の期待、ただで食物を獲得しようとする者に対する制裁が存在するためであると指摘している (Smith 1988: 240)。グループ規模が大きくなり、個人間での一対一による対面的な相互作用を持続的に維持できなくなれば、ただで食物を一方的に得るといった戦略が可能となる。このような理由からスミスとボイドは、人口規模が大きな集団では食物分配は有効に機能しなくなると考えている (Smith and Boyd 1990)。

4.2 血縁淘汰 (kin selection)

親が子を助けたり、血縁関係がある親族を助けることは、自分の持つ遺伝子をより多く次世代に残す行為として進化論的に当然のことと考えられている。理論的には、食物の分配相手は、エゴの血縁者になるはずである。ところが人間は、エゴの血縁者以外にも食物を分配している。

ハミルトンはこの矛盾を解決するために、包括的適応度 (inclusive fitness) という概念を提唱した (Hamilton 1964)。それは、個体の適応度だけでなく血縁個体を介して伝わる分を含めた適応度のことである。もしエゴやエゴの子どもを犠牲にしても、より多くの血縁個体を助けることができれば、エゴが持つ遺伝子と同じ遺伝子をより多く次世代に残すことができるのである。従って、人間は血縁関係にあるほかの個人のみならず、他人とも食物分配を行うと考えられるのである。

アチエの間では植物性食物やミッションで購入された食料は核家族内で両親から幼い子どもたちへと分配されており、血縁淘汰仮説はある程度支持されている。しかし、肉やハチミツは核家族を越えて分配されている。このようにアチエの人々は血縁関係がまったくない者にまで食物を与えたり、分け合う事例を血縁淘汰仮説によっては十分に説明することができない。カプランとヒルは、アチエのような小集団では個人が十分な数の交易パートナーを持てば、食物分配の範囲は近親族の範囲を越えて増加すると考えている。カプランとヒルはより小さな集団では互酬性の方が血縁淘汰よりも好まれていることを示唆している (Kaplan and Hill 1985a; 1985b)。

4.3 互惠的利他主義 (reciprocal altruism)

非血縁者に対する食物分配のような利他行動を説明するためにトリヴァースは互惠的利他主義という概念を提起した。これは、血縁淘汰仮説では、十分に説明できない「人間は血縁関係のない者にまで食物分配をするのはなぜか」という疑問を説明しようとするものである。すなわち、自分が相手に食物を与えるという利他行動をとるだけならば自分の適応度を上げることはできないが、もしその相手と将来も繰り返し相互に利他行動をとることができるならば、長い目で見れば両者ともに適応度を上げることができるのである。これは長期のベネフィットが短期のコストを上回るという意味で「時間差のある互酬性」ということができよう (Trivers 1971)。

なお、進化生態学者はreciprocityの概念を用いているが、文化人類学者が用いるreciprocityとは意味が異なる (Hawkes 1992: 270-271)。例えば、サーリンズは食物や

物財のおもに一方的な流れを指す時にもその概念を使用しているが、進化生態学者は字義どおり双方向の流れとなる「交換」という意味で使用している³⁾。

アチェの男性ハンターはもっとも多く生産し、他の人々に食物を提供しているにもかかわらず、見返りは最少であるという。カプランとヒルはバランスのとれた互酬性や偏差減少モデルではアチェの食物分配は説明できないと考えている (Kaplan and Hill 1985a; 1985b)⁴⁾。また、この仮説のもうひとつの問題は民族誌事例によって「時間差のある互酬性」が実証されていないことである (Pryor and Graburn 1980; Kaplan and Hill 1985a; 1985b)。

4.4 容認される盗み (tolerated theft)

諸個人はある資源を分配しなければコストが高くなりすぎる場合には、他者による操作や強制によってその資源をその他者に与えるかもしれない。資源の価値が競合者間で異なる場合には、その資源により多くの価値を置いた方がその獲得競争に勝つことが予想される。これは資源をめぐる争うことにかかるコストと、資源を入手もしくは保持することから得るベネフィットとの間にトレード・オフの関係があるからである。ブラートンジョーンズは、持てる者よりも持たざる者の方が資源を得るために多くの闘争コストをかけることができるため、持てる者が資源を分け与えるのは合理的であるとする「容認される盗み」(tolerated theft) という概念を提案している (Blurton Jones 1987)。この仮説は、社会人類学者であるピーターソン (Peterson 1993) が指摘した「要求による食物分配」が世界各地の狩猟採集民社会の間で広く観察されていることと合致する⁵⁾。

この仮説では食物をめぐる可視的な争いが存在するはずであるが、アチェの場合には認められなかった (Kaplan and Hill 1985a; 1985b)。また、食物資源が多量にあるような場合には容認された盗みが発生することが予測されるが、アカ・ピグミー社会やイヌイット社会のような多くの狩猟採集民社会には、自発的な食物分配や規則で決められた食物分配が存在し (例えば、今村 1993; 北西 1997; Nuttall 1991; Kishigami 1995; 2000)、この仮説では説明できない事例が多数存在している。

4.5 協同による獲得 (cooperative acquisition)

この仮説は、ハンターは獲物を捕獲するチャンスを増大させるために他のハンターと協同して狩猟に従事し、獲物はその協同狩猟に参加したハンターによって分配されるというものである。この仮説では、複数のハンターが協同で捕獲した獲物も、ハン

ターが単独で狩猟した獲物も、アチェの場合には同じやり方で分配されているという事実を説明することができない (Kaplan and Hill 1985a; 1985b)。

4.6 適応度ベネフィットとしての食物分配 (adaptive benefits)

ヒルとカプランは、既存の仮説ではアチェの食物分配を説明することが十分にはできないので、アチェのハンターたちは食物分配を行うことによって何か適応度を上げるベネフィットを得ているに違いないと考えた (Hill and Kaplan 1988a; 1988b)。ヒルらはアチェの腕のよいハンターは肉の提供の代償として、他の男性の妻と婚外セックスをすることができる点に着目し、腕のよいハンターは婚外子の数を加算すると一般のハンターに比べてより多くの子供を残していると指摘する。一般のハンターはより多くの肉が得られるように、肉を提供するハンターをキャンプ内に引き留めるために、妻と腕のよいハンターとの婚外セックスを黙認しているのだと示唆している (Hill and Kaplan 1988a; 1988b)。しかし、この肉とセックスとの一種の交換はアマゾン諸文化には妥当するかもしれないが、それ以外の文化領域では一般的であるとはいえない (Kelly 1995: 178)。

以上、述べてきたように進化生態学的なアプローチでは、アチェなどの狩猟採集民がなぜ食物を分配するのかについて説明するうえで限界があることが分かる。進化生態学的研究の問題点は、人間行動における文化・社会的要因をほとんど無視している点である (Kelley 1995; 口蔵 2000)。

5 霊長類研究

食物を分配するという行動は人類のみに認められる行動ではない。マーモセットやタマリンなどの新世界ザル、チンパンジーやボノボなどの類人猿でも食物分配が観察されている (Silk 1987)。しかしそれらは人類の食物分配行動とは違って積極的に分け与える行動ではない (室山 1999: 149)。

チンパンジーでもボノボでも食物分配は、母親と6歳ぐらいまでの子どもの間でもっと頻繁に観察される (五百部 1996: 25-26)。成人オスのチンパンジーではおもに肉が、ボノボではおもに植物性の食物が分配されている (五百部 1996: 25-26)。

チンパンジーの場合、肉の所有者は高順位のオスであり、肉を与える相手は老齢の個体や仲良しのオス、発情しているメスなどである (五百部 1996: 25-26)。成人の

オス同士では、仲のいいオスには積極的に分配するが、そうでないオスにはまったく分配しないなど、社会的な地位を高めたり、連帯を強めたり、社会関係を調整したりするための政治的な道具として利用されている (Bercovitch 1988; 西田 1992; 五百部 1996: 26)。ボノボの場合、特徴的なのは、交尾と交換に食物が分配されることがある点である (五百部 1996: 25-26)。デ・ワールによると、チンパンジーの間では食物分配が毛づくろいなど他の行動と交換されていることが観察されている (de Waal 1989)。

食物分配行動を進化の点から見た五百部は、チンパンジーの成人オス同士の食物分配は政治的な駆け引きの道具として社会関係を調節するために発達してきたと考える (五百部 1996: 25-26)。さらに現在の人類の多様な食物分配は、「食物の供給を確実にするためというよりは、個体間の社会関係の調節や集団間の協力関係の構築・維持のために発達してきた」(五百部 1996: 25-26) と主張している。

ボノボやチンパンジーには食物分配とみなしうる行動が観察されるので、人類と共通する要因が発見される可能性がある。共通性とは、例えば社会性に富む小規模集団における生活の「シェアリング」や経験の共有、優れた記憶力などである。しかしまた、ボノボは物と物を交換することはないなど、人間とボノボの分配行動には大きな違いが存在している (小馬 1999: 12)。従って、人類に認められる食物分配行動の多様性は、人類に特有な文化・社会・歴史的な要因で説明しなければならないだろう。

6 研究成果と問題点の整理

本稿では食物分配に関する研究を学問別に概観した。ここでは、これまでの研究成果を整理し、今後の研究課題について考えてみたい。

6.1 研究成果の整理

本稿で既存の研究を概観した結果、大半の研究は狩猟採集民（ないしは類人猿の個体）がなぜ食物分配を行うかについて解明しようとするものであった。そしてそれらの研究の多くは、生態学的に適応的であるとする説明と社会・経済的な機能・効果による説明、進化生態学的な説明に基づいている。また、世界観や社会組織、生活活動全体との間に認められる対応関係に注目する文化的説明が存在した。

生態学的適応仮説は、狩猟採集活動に起因する食料獲得の安定性を解消する手段として食物分配に着目するものである。この仮説では、食物分配を個人レベルでの狩猟の失敗の危険性や狩猟能力や捕獲量における偏差を減少させる一種の保険のようなも

のとして捉えている。この見解は多くの研究者から支持されてきた仮説である（Kelly 1995）。

社会経済的な機能仮説は、食物分配が持つ社会・経済的な機能や効果を強調する。多くの狩猟採集民社会、特に即時的収穫システム型社会においては、食物分配には物質的かつ政治的な平準化機能や社会関係の創出・維持・連帯機能があると指摘されている。これらの効果や機能があることを認めるとしても、はたして狩猟採集民が食物分配を行っていることの説明として十分であるといえるかどうか疑問が残る。今回のレビューによって、食物分配にかかわる当事者の心理や食物分配と社会変化の関係の解明はいまだにほとんどなされておらず、今後の重要な研究課題であることが判明した⁶⁾。

進化生態学的な仮説は、おもに生物の利他行動に基づく説明である。代表的なものは、血縁淘汰仮説、互惠的利他主義仮説、容認される盗み仮説、協同による獲得仮説であるが、アチェなどの事例による検証では必ずしも正しくないことが指摘されている。

狩猟採集民が食物分配を行う理由を、環境と人間との関係を象徴する世界観や寛容さという倫理観に求める研究も存在している。これらの研究は食物分配という行動を容認し、奨励するイデオロギーにその理由を求めるが、イデオロギー自体が行動を生み出すことはないため、十分な説明とはいいがたいと私は考えている。

社会関係に着目する研究は、どのように食物分配が行われているかを理解するうえで役に立つが、親族関係など特定の関係を指摘するだけでは、なぜ人々が非親族とも食物分配を行うのかを十分に説明できない。

霊長類の食物分配と狩猟採集民社会の食物分配についてひとこと触れておきたい。霊長類の食物分配行動を進化の点から考察する霊長類学者（生物人類学者）は、その行動の社会・政治的な機能に着目している点が、食物供給の安定化の機能を重視する文化人類学者とは異なっている。霊長類と人類の食物分配の比較研究は、生物的存在としてのヒトと文化が交叉する接点を解明するための重要な研究課題といえよう。

6.2 イヌイット研究による狩猟採集民研究への貢献の可能性

次に、このレビューの結果に基づいて、イヌイット研究が狩猟採集民研究に貢献する可能性について指摘を行いたい。

今村（1993）や北西（1997）の研究は、対面的な関係に基づく交渉による食物分配を取り上げているが、彼らはキャンプの人口規模が異なれば、食物分配行動に違いが

認められることを報告している。

人口規模の小さなキャンプ集団では、食料分配は親族関係という要因よりも、狩猟活動など生活を全面的に共有するという、親密で対面的な関係に基づいて実施されているという。一方、定住村落や農村の近くにある規模の大きなキャンプ集団に移動した場合には、分配者は食物を分け与える人を選ぶため、小型キャンプ地で観察されるような全面的な分配は影をひそめるといえる。人口規模の大きな場所においては、親族関係や物理的な距離が重要な要因となるらしい。同様な差異はイヌイット社会でも観察される。

カナダ・イヌイットの食物分配は市場経済への接合や1960年代以降の定住化などによって変化を遂げてきたことは事実である。にもかかわらず、イヌイットは現代という脈絡の中で、食物分配を行い続けている。1980年代から2000年頃までのイヌイット社会を事例とすれば、キャンプ地での分配と村での分配の間に大きな違いが存在している。前者の場合、キャンプや狩猟をともにする家族間では親族関係がなくても全面的な食物の分配が行われる。ところが後者の場合には、ハンターが村に持ち帰った肉はおもに親族関係に沿って分配され、流通されるという傾向が見られる。

メイヤーズは、オーストラリア先住民のピンツピの人口がセトルメントにおいて増大した時に、分配のネットワークが機能しなくなった事例を報告している。この現象について、あまりにも多くの人々が分配を要求し、かつ互酬することへのプレッシャーが欠如してしまったために、住民の間で食物がほとんど分配されなくなったとメイヤーズは説明している (Myers 1988: 58-59)。

このような事例を考慮すると、生活全体を共有するような人口規模の小さな集団とそれらが複数集合した人口規模の大きな集団では、食物分配の範囲や頻度、特徴に違いが見られるといえよう。すでに紹介したようにウインターハルダーは、ハンターが7, 8人の小集団において食物分配の効果は最大になると指摘し (Winterhalder 1986a; 1986b)、スミスは、集団規模が大きくなり人間関係が対面的でなくなると人々は貯蔵をはじめため、食物分配は有効に機能しなくなると述べている (Smith 1988)。

対面的な関係から形成されている人口規模の小さな集団では食物分配が全員のあいだで頻繁に行われている理由を説明する2つの仮説を紹介しておきたい。インゴールドは「緊密な社会集団において直接顔を突き合わせている者同士の関係」に基づいて分配が行われる (Ingold 1988: 283) と指摘しているが、これは丹野 (1991) や今村 (1993; 1996)、北西 (1997) らが指摘しているように、小規模キャンプにおいては親族関係のあるなしにかかわらず、生活を共有し、協同作業を行う人々の間で食物分配

が行われることと同じ意味を持っていると思う。生活を全面的に共有することが、全員を巻き込む頻繁な食物分配を生み出しているといえるだろう。もうひとつの仮説は、狩猟採集民が食物分配を義務的に行っている理由を説明しようとするものである。リッチイズ (Riches 1981) は次のような仮説を提起している。狩猟採集民社会では少人数で集団を形成し、同じキャンプに住む者同士が密接に相互作用をし、複数の利害を共有しながら生活を営んでいる。社会関係はそれらの利害とかがわっており、社会関係を維持することは生存に有利にはたらく。食物を与えずにこの社会関係を壊すよりは、一時的に食物を提供して関係を維持する方が、長い目で見ると適応的であるといえる。このため、与えることが義務であるという観念が再生産されているというのである。

キャンプ地では構成員全員の間で食物分配が行われるのに対し、諸キャンプ集団が混住している人口規模が大きい村では、異なるやり方で食物分配が行われるのはなぜかを解明することは重要な研究課題であるといえよう。この問題を解明するためには、食物分配が行われる社会関係を詳細に調査し、分析することが必要となろう。

既存の研究を整理をすると、変化を遂げてきた現代の社会・経済環境の中で狩猟採集民による食物分配が行われてきており、社会・経済的な機能や効果が認められることを報告する研究が少数ながら存在することが分かった。しかし、特定の調査地において通時的に食物分配が行われ、なぜ、そしてどのように変化してきたかを解明した研究や、現在の社会・経済環境の中で食物分配がどのように行われ、どのような機能や効果を果たしているかに関する研究はさわめて少ない。

さらに極北先住民社会を例にあげれば、西はチュクトカ半島やアラスカのユッピック、アラスカのイヌピアック、カナダやグリーンランドに住むイヌイットの食物分配やその歴史的な変化について、各地域に住む特定の集団の食物分配に関する研究報告は増加してきた (例えば、Van de Velde 1956; Damas 1972; Langdon and Worl 1981; Fienup-Riordan 1983; Burch 1988; Nuttall 1991; Bodenhorn 2000; Kishigami 1995; 2000; Wenzel 1981; 1995; 2000; Hovelsrud-Broda 2000; Levesque et al. 2000)。しかし地域間や地域内における食物分配の差異や共通性およびその歴史的変化を解明するための比較研究は行われていないのが現状である。

ここで指摘したいいくつかの問題はイヌイット研究の研究課題であるのみならず、イヌイット研究が狩猟採集民研究に貢献できる可能性が高い課題であると私は主張する。

7 結 語

本稿では、狩猟採集民社会における食物分配に関する研究を社会・人類学的研究、生態人類学的研究、進化生態学的研究および霊長類研究の分野に分けて紹介した。そして研究成果を整理し、それぞれの問題点を指摘した。現在のところ、狩猟採集民が食物分配を行う理由として、生態学的な適応機能を強調する「偏差減少仮説」が多くの研究者から支持を得ているが、ケリーが指摘するように、世界各地の狩猟採集民の社会における様々な形態の食物分配をひとつの仮説やモデルで説明することはきわめて困難なことであるといえよう (Kelly 1995: 181)。

私は本稿における検討を通していくつかの今後の研究課題を提示した。それらの中で、現在のイヌイト研究が解明に貢献できる課題は、下記の通りである。

- 課題1 人口規模が小さいキャンプ地と人口規模が大きい村における食物分配の違いを解明すること。
- 課題2 ひとつの集団を対象として食物分配の変化と現状を詳細な通時的研究によって解明すること。
- 課題3 地域間や地域内における食物分配の差異や共通性およびその歴史的变化を解明すること。

私は1984年よりカナダ国ケベック州ヌナヴィクのアクリヴィク村において親族関係や食物分配の研究を実施してきた。今後、この調査をもとに課題1と課題2を解明したいと考えている。そして、アクリヴィク村におけるイヌイトの食物分配の実践とその変化を極以北地域全体の中に位置づけるために、課題3の研究を行いたいと考えている。

この3つの課題を調査し、その成果を他の狩猟採集民社会の事例と比較研究することによって、狩猟採集民はなぜ食物を分配するのか、その食物分配は歴史的にどのように変化してきたのか、またどのような食物分配が世界各地の狩猟採集民社会に存在するのかについて理解を深めることができると私は考える。

謝 辞

本研究は先端民族学プロジェクトおよび国立民族学博物館共同研究会「先住民による水産資源の分配と商業流通」の研究成果の一部である。共同研究会において口頭発表を行った際に、共同研究会のメンバーの皆様からご批判やコメントを頂いた。また、草稿についてスチュアートヘンリ先生、池谷和信氏、北西功一氏からコメントを頂戴した。記して感謝の微意を表す次第である。

注

- 1) 丹野はimmediate return systemsを「即時的利得システム」と、delayed return systemを「遅延的利得システム」と訳している(丹野 1991: 37)。
- 2) 貨幣経済の浸透が食物分配に及ぼしている影響は多様である。オーストラリア先住民ジンナンが住むガマディ村で調査を実施した松山は、地元で捕獲されたワラビーや魚は分配されるが、小麦粉や缶詰など購入したマーケット・フードはほとんど分配されることがないと報告している(松山 1994: 100)。グリーンランドのアマサリク地区イントック村で調査を実施したホブスラド=ブローダは、カントリー・フードのみが世帯を越えて分配され、現金や店で購入された物品は世帯を越えて分配されることがほとんどないと報告している(Hovelsrud-Broda 1999: 45-46)。一方、カナダのヌナヴィク地域のアクリヴィク村などでは、マーケット・フードも分配の対象となっている。
- 3) 進化生態学者のreciprocityを「互恵性」、文化人類学者のそれを「互酬性」とし、意図的に区別した。伊藤(1995)は、文化人類学や社会学の分野で使用されている「互酬性」と「交換」という2つの概念の異同を検討し、互酬性は交換の基礎概念であると指摘している。すなわち、彼は「互酬性は、一方では交換という行動を包み込みながら、他方では、交換そのもののあり方を総体として制御する関係概念ということになる」と(伊藤 1995: 38)と述べている。
- 4) モース(1973)の全体的交換は、「時間差のある互酬性」と考えてよいだろう。小馬は、「全体的交換の環は、一つの場面だけを切り取ってみれば、常に一方的な贈り物として現れるからです。お返しまでにかかる時間が長ければ、この魔法はそれだけ強力になります。」(小馬 1999: 44)と述べている。
- 5) 表面的には「容認される盗み」(Blurton Jones 1987)と「要求による食物分配」(Peterson 1993)に共通性が認められる一方、根本的な相違点も存在する。前者は、ベネフィットを最大化しようとする個体間のやりとりであるのに対し、後者は特定の社会関係に沿って行われる食物分配である。
- 6) 食物分配を利他的な行動と見なし、社会心理学的なアプローチから研究を進めている北海道大学の亀田達也のグループが存在する(例えば、Kameda, Takezawa, Tindale and Smith 2002)。

文 献

- Altman, J. and N. Peterson
 1988 Rights to Game and Rights to Cash among Contemporary Australian Hunter-Gatherers. In T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers Vol.2: Property, Power and Ideology*, pp.75-94. Oxford: Berg.
- Bahuchet, S.
 1985 *Les Pygmées Aka et la Forêt Centrafricaine*. Paris: SELAF.
 1990 Food Sharing among the Pygmies of Central Africa. *African Studies Monographs* 11(1): 27-53.

- Barnard, A.
2002 The Foraging Mode of Thought. In H. Stewart, A. Barnard and K. Omura (eds.) *Self- and Other Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.60), pp.5-24. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Bercovitch, F.B.
1988 Coalitions, Cooperation and Reproductive Tactics among Adult and Male Baboons. *Animal Behaviour* 36: 1198-1209.
- Biesele, M. and N. Howell
1981 The Old People Give You Life: Aging among !Kung Hunter-Gatherers. In P.T. Awass and S. Harrell (eds.) *Other Ways of Growing Old*, pp.77-98. Stanford: Stanford University Press.
- Bird-David, Nurit
1990 The Giving Environment: Another Perspective on the Economic System of Gatherer-Hunters. *Current Anthropology* 31(2): 189-196.
- Blurton Jones, N.G.
1987 Tolerated Theft, Suggestions about the Ecology and Evolution of Sharing, Hoarding and Scrounging. *Social Science Information* 26(1): 31-54.
- Bodenhorn, B.
2000 It's Good to Know Who Your Relatives Are but We Were Taught to Share with Everybody: Shares and Sharing among Inupiaq Households. In G.H. Wenzel, G. Hovelsrud and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.27-56. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Burch, E. Jr.
1988 Mode of Exchange in North-West Alaska. In T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers Vol.2: Property, Power and Ideology*, pp.95-109. Oxford: Berg.
- Cashdan, E.
1985 Coping with Risk: Reciprocity among the Basarwa of Northern Botswana. *Man* 20: 454-474.
- Damas, D.
1972 Central Eskimo Systems of Food Sharing. *Ethnology* 11: 220-240.
- de Waal, F. B. M.
1989 *Peacemaking among Primates*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Dowling, J.
1968 Individual Ownership and the Sharing of Game in Hunting Societies. *American Anthropologist* 70(3): 502-507.
- Ellanna, L.J. and G. K. Sherrod
1984 The Role of Kinship Linkages in Subsistence Production Alaska Department of Fish and Game, Division of Subsistence. *Technical Paper Series #100*.
- Fienup-Riordan, A.
1983 *The Nelson Island Eskimo*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- Gould, R.
1982 To Have and Have Not: The Ecology of Sharing among Hunter-Gatherers. In N. Williams and E. Hunn (eds.) *Resource Managers: North American and Australian Hunter-Gatherers*, pp.69-92. Boulder: Westview Press.
- Hamilton, W.D.
1964 The Genetical Evolution of Social Behavior (I). *Journal of Theoretical Biology* 7: 1-16.
- Hawkes, K.
1992 Sharing and Collective Action. In E.A. Smith and B. Winterhalder (eds.) *Evolutionary Ecology and Human Behavior*, pp.269-300. New York: Aldine De Gruyter.
- Hill, K. and H. Kaplan
1988a Tradeoffs in Male and Female Reproductive Strategies among the Ache: Part 1. In L. Betzig, M. Mulder and P. Turke (eds.) *Human Reproductive Behavior: A Darwinian Perspective*, pp.277-289. New York: Cambridge University Press.

- 1988b Tradeoffs in Male and Female Reproductive Strategies among the Ache: Part 2. In L. Betzig, M. Mulder and P. Turke (eds.) *Human Reproductive Behavior: A Darwinian Perspective*, pp.277-289. New York: Cambridge University Press.
- Hovelsrud-Broda, G.
 1999 The Integrative Role of Seals in East Greenlandic Hunting Village. *Arctic Anthropology* 36(1/2): 37-50.
 2000 "Sharing", Transfers, Transactions and the Concept of Generalized Reciprocity. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.193-214. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Hunt, R.
 2000 Forager Food Sharing Economy: Transfers and Exchanges. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.7-26. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 市川光雄
 1982 『森の狩猟民—ムブティ・ピグミーの生活』京都：人文書院。
 1991 「平等主義の進化史的考察」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然史』pp.11-3, 平凡社：東京。
 五百部裕
 1996 「人類のはるかなる過去—人類以前の物語」片山一進ほか著『人類史をたどる—自然人類学入門』pp.1-32, 東京：朝倉書店。
- Ikeya, K.
 1993 Goat Raising among the San in the Central Kalahari. *African Study Monographs* 14(1): 39-52.
 1996a Road Construction and Handicraft Production in the Xade Area, Botswana. *African Study Monographs* (Supplementary Issue) 22: 67-84.
 1996b Dry Farming among the San in the Central Kalahari, Botswana. *African Study Monographs* (Supplementary Issue) 22 : 85-100.
- 今村薫
 1993 「サンの共同と分配—女性の生業活動の視点から」『アフリカ研究』42: 1-25。
 1996 「ささやかな饗宴—狩猟採集民ブッシュマンの食物分配」田中二郎ほか編著『続自然社会の人類学』pp.51-80, 京都：アカデミア出版会。
- 今村仁司
 2000 『交易する人間—贈与と交換の人間学』東京：講談社。
- 伊藤幹治
 1995 『贈与と交換の人類学』東京：筑摩書房。
- Ingold, T.
 1988 Notes of the Foraging Mode of Production. In T. Ingold, D. Riches, and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers Vol.1: History, Evolution and Social Change*, pp.269-285. Oxford: Berg.
- Kameda, T., M. Takezawa, R.S. Tidale and C.M. Smith
 2002 Social Sharing and Risk Reduction: Exploring a Computational Algorithm for the Psychology of Windfall Gains. *Evolution and Human Behavior* 23: 11-33.
- Kaplan, H. and K. Hill
 1985a Food Sharing among Ache foragers: Tests for explanatory Hypotheses *Current Anthropology* 26(2): 223-246.
 1985b Hunting Ability and Reproductive Success among Male Ache Foragers: Preliminary Results. *Current Anthropology* 26(1): 131-133.
- Kelly, R. L.
 1995 *The Foraging Spectrum: Diversity in Hunter-Gatherer Lifeways*. Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Kent, S.
 1993 Sharing in an Egalitarian Kalahari Community. *Man* (N.S.) 28: 479-514.

岸上伸啓

- 1996a 「カナダ・イヌイットの社会経済変化——ケベック州のイヌクジュアク村の事例を中心に」『国立民族学博物館研究報告』21(4): 715-775。
1996b 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」スチュアート ヘンリ編『採集狩猟民の現在』pp.13-52, 東京: 言叢社。
1998 『極北の民 カナダ・イヌイット』東京: 弘文堂。
2001 「カナダ・イヌイット社会における海洋資源の利用と管理——ヌナヴィクのシロイルカ資源の場合」『人文論究』70: 29-52。
2002 「狩猟採集民社会における食物分配の再検討」日本民族学会第36回研究大会にて報告(6月1日, 金沢大学文学部において)
n.d. 「狩猟採集民社会における食物分配の諸類型について」

Kishigami, N.

- 1995 Extended Family and Food Sharing Practices among the Contemporary Nestilik Inuit: A Case Study of Pelly Bay. 『北海道教育大学紀要 (社会科学編1部B)』45(2): 1-9。
2000 Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
2002 A Typology of Food Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. Paper read at CHAGS 9, Edinburgh, Scotland. September, 2002.

北西功一

- 1997 「狩猟採集民アカにおける食物分配と居住集団」『アフリカ研究』51: 1-28。
2002 「分配者としての所有者——狩猟採集民アカにおける食物分配」市川光雄・佐藤弘明編『森と人の共存世界』pp.61-91, 京都: 京都大学学術出版会。

Kitanishi, K.

- 1996 Variability in the Subsistence Activities and Distribution of Food among Different Aged Males of the Aka Hunter-Gatherers in Northeastern Congo. *African Studies Mongographs* 17(1): 35-57.
1998 Food Sharing among the Aka Hunter-Gatherers in Northeastern Congo. *African Studies Mongographs* (Supplementary Issue) 25: 3-32.
2000 The Aka and Baka: Food Sharing among Two Central Africa Hunter-Gatherer Groups. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.149-169. Osaka: National Museum of Ethnology.

小馬徹

- 1999 『贈り物と交換の文化人類学』(神奈川大学評論ブックレット9) 東京: お茶の水書房。

口蔵幸雄

- 2000 「最適採食戦略——食物獲得の行動生態学」『国立民族学博物館研究報告』24(4): 767-871。

Langdon, S. and R. Worl

- 1981 Distribution and Exchange of Subsistence Resources in Alaska. Division of Subsistence, Technical Paper Series #55, Alaska Department of Fish and Game.

Leacock, L. and R. Lee (eds.)

- 1982 Introduction. In E. Leacock and R. Lee (eds.) *Politics and History in Band Societies*, pp.1-20. Cambridge: Cambridge University Press.

Lee, R.

- 1979 *The !Kung San: Men, Women and Work in a Foraging Society*. London: Cambridge University Press.
1993 *The Dobe Ju/'hoansi*. Fort Worth, TX: Harcourt Brace College Publishers.
1999 Hunter-Gatherer Studies and the Millennium: A Look Forward (and Back) 『国立民族学博物館研究報告』23(4): 821-845。

Lee, R. and I. Devore (eds.)

- 1968 *Man the Hunter*. Chicago: Aldine Publishing Company.

- Levesque, C., D. de Juriew, C. Lussier and N. Trudeau
 2000 *Between Abundance and Scarcity: Food and the Institution of Sharing among the Inuit of the Circumpolar Region during the Recent Historical Period*. Montreal: Universite du Quebec, INRS-Urbanisation, Culture et Societe.
- Marshall, L.
 1961 Sharing, Talking and Giving: Relief of Social Tensions among the !Kung Bushmen. *Africa* 31: 321-349.
 1976 *The !Kung of Nyae Nyae*. Cambridge: Harvard University Press.
- モース, M.
 1973 「贈与論—太古の社会における交換の諸形態と契機」『社会学と人類学I』有地亨ほか共訳, pp.219-400, 東京: 弘文堂。
- 松山利夫
 1994 『ユーカーリの森に生きる』東京: 日本放送出版協会。
- 室山泰之
 1999 「利他行動」西田利貞・上原繁男編『霊長類学を学ぶ人のために』pp.140-161, 京都: 世界思想社。
- Murphy, R. and J. Stewart
 1956 Tappers and Trappers: Parallel Process in Acculturation. *Economic Development and Culture Change* 4: 335-355.
- Myers, F.
 1988 Burning the Truck and Holding the Country: Property, Time and the Negotiation of Identity among Pintupi. In T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.) *Hunter-gatherers Vol. 2: Property, Power and Ideology*, pp.52-74. Oxford: Berg.
- 西田利貞
 1992 「霊長類における援助行動の進化」柴谷篤弘・長野敬・養老孟司編『生態学から見た進化』pp.247-306, 東京: 東京大学出版会。
- Nuttall, M.
 1991 Sharing and the Ideology of Subsistence in a Greenlandic Sealing Community. *Polar Record* 27(162): 217-222.
- Peterson, N.
 1993 Demand Sharing: Reciprocity and the Pressure for Generosity among Foragers. *American Anthropologist* 95: 860-876.
- Peterson, N. and T. Matsuyama (eds.)
 1991 *Cash, Commoditisation and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies No.30). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Price, J.
 1975 Sharing: The Integration of Intimate Economies. *Anthropologica* (N.S.) 17(1): 3-27.
- Pryor, F.L. and N. H.H. Graburn
 1980 The Myth of Reciprocity. In K.J. Gergen, M.S. Greenberg and R.H. Wills (eds.) *Social Exchange: Advances in Theory and Research*, pp.215-237. New York and London: Plenum Press.
- Riches, D.
 1981 The Obligation to Give: An Interactional Sketch. In L. Holy and M. Stuchlik (eds.) *The Structure of Folk Models* (Monograph 20), pp.209-203. London: Academic Press.
- Sahlins, M.
 1965 On the Sociology of Primitive Exchange. In Banton, M. (ed.) *The Relevance of Models for Social Anthropology* (Monographs of the Association of Social Anthropologists No.1), pp.139-236. London: Tavistock.
 1972 *Stone Age of Economics*. Chicago: Aldine Publishing Company.
- サーリンズ, マーシャル
 1984 『石器時代の経済学』山内ひさし訳, 東京: 法政大学出版局。
- Service, E.
 1962 *Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective*. New York: Random House.

- 1966 *The Hunters*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Silk, J.B.
1987 Social Behavior in Evolutionary Perspective. In B.B. Smuts et al. (eds.) *Primate Societies*, pp.319-329. Chicago: The University of Chicago Press.
- Smith, E.A.
1988 Risk and Uncertainty in the 'Original Affluent Society': Evolutionary Ecology of Resource-Sharing and Land Tenure. In T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.) *Hunters and Gatherers Vol.1: History, Evolution and Social Change*, pp.222-251. Oxford: Berg.
- Smith, E.A. and R. Boyd
1990 Risk and Reciprocity: Hunter-Gatherer Socioecology and the Problem of Collective Action. In E. Cashdan (ed.) *Risk and Uncertainty in Tribal and Peasant Economics*, pp.167-192. Boulder: Westview Press.
- Smith, E.A. and B. Winterhalder (eds.)
1992 *Evolutionary Ecology and Human Behavior*. New York: Aldine De Gruyter.
スチュアート ヘンリ
1991 「食糧分配における男女の役割分担について」『社会人類学年報』17: 115-127。
- Tanaka, J.
1980 *The San, Hunter-Gatherer of the Kalahari: A Study in Ecological Anthropology*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 丹野 正
1991 「『分かち合い』としての『分配』」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』pp.35-55, 東京: 平凡社。
- Testart, A.
1987 Game Sharing Systems and Kinship Systems among Hunter-Gatherers. *Man* (N.S.) 22: 287-304.
- Trivers, R. L.
1971 The Evolution of Reciprocal Altruism. *Quarterly Review of Biology* 46: 35-57.
- 渡辺 仁
1990 「生業分化と社会階層化：北太平洋沿岸採集民における事例」『現代思想』18(12): 169-176.
- Van de Velde, F.
1956 Rules for Sharing the Seal amongst the Arviliguarmiut Eskimo. *Eskimo* 41: 3-6.
- Wenzel, G.W.
1981 *Inuit Ecology and Adaptation: The Organization of Subsistence* (Canadian Ethnology Service Mercury Series Paper No.77). Ottawa: National Museum of Man.
1991 *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*. Toronto: University of Toronto Press.
1995 Ningiqtuq: Resource Sharing and Generalized Reciprocity in Clyde River, Nunavut. *Arctic Anthropology* 32(2): 43-60.
2000 Sharing, Money, and Modern Inuit Subsistence: Obligation and Reciprocity at Clyde River, Nunavut. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.61-85. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Wiessner, P.
1982 Risk, Reciprocity, and Social Influence on !Kung San Economies. In E. Leacock and R. Lee (eds.) *Politics and History in Band Societies*, pp.61-84. Cambridge: Cambridge University Press.
- Winterhalder, B.
1986a Diet Choice, Risk, and Food Sharing in a Stochastic Environment. *Journal of Anthropological Archaeology* 5: 369-392.
1986b Optimal Foraging : Simulation Studies of Diet Choice in a Stochastic Environment. *Journal of Ethnobiology* 6: 205-223.
- Winterhalder, B and E.A. Smith
1981 *Hunter-Gatherer Foraging Strategies: Ethnographic and Archaeological Analyses*. Chicago

and London: The University of Chicago Press.

Woodburn, J.

1982 Egalitarian Societies. *Man* (N.S.) 17: 431-451.

1998 Sharing Is Not a Form of Exchange: An Analysis of Property-Sharing in Immediate-Return Hunter-Gatherer Societies. In C.M. Hann (ed.) *Property Relations: Renewing the Anthropological Tradition*, pp.48-63. Cambridge: Cambridge University Press.